

降臨節第2主日 マタイ3章1―12節

〔直訳〕

- 1 だがそれらの日々に 現われる 洗礼者ヨハネが、
宣べ伝えながら ユダヤの荒野で、
- 2 「そして」言いながら、
「あなたがたは悔い改めなさい、なぜなら近づいた 天の国が」。
- 3 なぜならこの者は ある 預言者イザヤを通して言われた者で すなわち、
「声 叫んでゐる者の 荒野で、
あなたがたは準備せよ 主の道を、
真つすぐに あなたがたは作りなさい 彼の道筋を」。
- 4 だがヨハネ自身は 持っていた
駱駝の毛からの彼の衣を そして 革の帯を 彼の腰の回りに、
だが彼の食物は あった いなごで そして野性の蜂蜜で。
- 5 その時 出て来た 彼のもとに エルサレムが
そして すべての ユダヤが、 そしてすべての ユダヤの周辺地域が、
- 6 そして 彼らは洗礼を施された。ヨルダン川で 彼によって、告白しながら 彼らの罪を。
- 7 だが見て ファリサイ派とサドカイ派の多くの人が 来ているのを 彼の洗礼へ、
彼は言った 彼らに、
「子孫たち 蝮の、誰が 指示したのか あなたがたに
逃れることを 来りつつある怒りから。
- 8 だからあなたがたは作りなさい 実を ふさわしい 悔い改めに。
- 9 そして あなたがたは考えるな 言うことを 自分のうちで、
『父を 私たちは持っている アブラハムを』
なぜなら私は言う あなたがたに 次のことを、
できる 神は これらの石から 起こすことを 子供たちを アブラハムに。
- 10 だがすでに 斧が 木々の根の元に 横たわっている。
だからすべての 良い実を作らない木は 切り倒される、そして 火に 投げ込まれる。
- 11 私は確かに あなたがたに 洗礼を施す。水で 悔い改めのため、
だがわたしの後から来る者は 私より強く ある、
その者の 私はない 十分で サンダルを 解くために。
彼は あなたがたに 洗礼を施すだろう。聖なる霊で そして 火で。
- 12 その者の 箕が 彼の手に、
そして 彼は徹底的に清めるだろう 彼の打穀場を、
そして 彼は集めるだろう 彼の麦を 倉に、
また もみ殻を 彼は焼き払うだろう 消えない火で。」

〔新共同訳〕

1 そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、2 「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。3 これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。』」

4 ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。5 そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、6 罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

7 ヨハネは、フアリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8 悔い改めにふさわしい実を結べ。9 『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。10 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。11 わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。12 そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

①主の道を準備せよ（1―6節）

I 洗礼者ヨハネの使信（1―2節）

① 「それらの日々」

冒頭のこの句によって時間が設定され、終末の時（メシアの時代）の開始が宣言される。救いの歴史は頂点に差しかかり、決定的な救いの時を迎えようとしている。ここに、メシアの到来を預言し続けた旧約時代最後の預言者として洗礼者ヨハネが登場する。彼は「荒れ野」で声を上げる。

荒れ野は、余計なものが一切はぎ取られ、人の心の真実が表れる場所である。そこでヨハネは「悔い改めなさい。なぜなら天の国は近づいた」と、人々に悔い改めを呼びかけるが、悔い改めの必要を説く根拠として「天の国」の到来をあげる。

② 「あなたがたは悔い改めなさい、なぜなら近づいた 天の国が」

イエスもこの言葉で宣教を開始する（マタ四 17）。直訳にあるように、原文には「なぜなら」という言葉がある。人が悔い改める前に、天の国は近づいている。「悔い改める」とは、生き方を刷新すること。聖書では「天の国」の到来との関係で語られているので、自分の「内」に目を向けて反省することではない。「外」、すなわち「神の支配」に目を向けて、そこに自分をゆだねることを示す。神が地上に支配を及ぼそうとしているという現実を目を向け、自分の生き方をそれゆだねることが彼の言う悔い改めである。そこからマタイ 5―7章の「山上の説教」のような新しい価値観と生き方が生まれてくる。神に身を合わせ、神の支配のもとに生きるとき、日常の具体的な生活も刷新されてゆく。

◎天の国

他の福音書では「神の国」。神の名前を口にするのを避け、畏敬の念を込めて「天」と表現した。「国」と訳されているのはバシレイアー。この語は名詞バシレウス（王）から派生した名詞で、基本的に「王による支配・王位」を表すが、地理的な意味合いを強調し「王権が及ぶ領域・王国」の意味にもなる。

- (1)「ごく普通に「世俗的な王権や王国」を表す。悪魔はすべての「国々」とその繁栄ぶりをイエスに見せて、彼を誘惑する（マタ四8）。
- (2)「神に選ばれたメシア王の支配や王国」に使われる。マリアから生まれるイエスの「支配」は終わることがない（ルカ一33）。しかし、イエスの「国」はこの世には属していない（ヨハ一八36）。

- (3)「神の王的な支配・神の国」をも表すことができる。黙示思想は終末時に神が王的な支配を行うと教えていたが、新約聖書では、イエスによってそれが成就したと宣言し、人間が罪や死から解放される時が来たと説く（マタ四15―16、ルカ四18―19）。

「天の国（神の国）」とは、一定の領域や組織を持った「国」ではなく、「神が王として支配する」という動的な側面を強調した表現。ここでも、神が地上に介入し、まことの王として支配を開始しようとしているという事態を指す。

II 洗礼者ヨハネの役割（3―4節）

① 「駱駝の毛からの衣・革の帯・いなごの野性の蜂蜜」

当時の人々は、メシア（救い主）の到来に先駆けてエリヤが再来すると考えていた（マラ三23）。これらは預言者エリヤの姿を彷彿とさせる。（王下一8）。だから人々は彼のもとにぞくぞくと集まって来る。民衆は洗礼者ヨハネこそ再来のエリヤだと期待した（マタ一七10以下）。

② 旧約聖書を用いて、洗礼者ヨハネの役割を明らかにする

3節ではマタイが、イザヤ40章3節「荒野で叫んでいる者の声。あなたがたは主の道を準備せよ…」の言葉を洗礼者ヨハネの姿に重ね、さらに4節では列王記下1章8節に述べられた預言者エリヤの容貌を彷彿とさせる表現を用いて、洗礼者ヨハネこそメシアに先がけて現れる再来のエリヤだと主張している。

III 人々の応答（5―6節）

① 「エルサレムが…出て来た」

擬人化した表現。人々が押し寄せる様子を強調している。

② 「彼らは洗礼を施された…彼らの罪を告白しながら」

人々は「悔い改めなさい」という彼の呼びかけに応じて集まり、罪を告白して、「洗礼を施される」。罪とは、神に背を向けて生きてきた人間と神との間に生じたずれである。神の支配が始まるうとしている今、このずれをなくす必要がある。そのために洗礼者ヨハネは、悔い改めの具体的な表明として、彼らに罪を告白させ、洗礼を授け、人々の生きる道を神へと真っ直ぐに向けさせる。

③ 1―6節ではまず洗礼者ヨハネのメッセージを要約し、彼の働きの意義を旧約聖書から裏付け、最後に人々がそれに対して示した好意的な反応を描いている。このように描くことによって、待望から成就への転換点が現実になるうとして、今を強調し、その緊張を表そうとしている。

② 悔い改めにふさわしい実（7―10節）

① 「ファリサイ派・サドカイ派」

すべての人々に語りかけていた洗礼者ヨハネは、7節からは相手をしぼり、「ファリサイ派とサドカイ派の人」に話しかける。両者の違いは、社会が変化するにつれて律法と現実生活との間に生じたずれに対する対処の仕方の違いによって生み出された。ファリサイ派は、律法に新たな解釈を加えることで律法に従った生活を実現しようと考えた。一方、保守的な上流階級に支持者を持つサドカイ派は、変化の必要性を認めることなく、伝統的な生き方に固執した。

② 「彼の洗礼へ来ているのを」

新共同訳は「洗礼を受けに来たのを見て」と訳しているが、原文は「彼らが」彼の洗礼へ来ているのを見て」であって、「受けに」にあたる言葉はない。彼らの中には洗礼者ヨハネの使信を真剣に受け止めた者もいるだろうが、しかし大多数は好奇心から、あるいは、彼の過ちをあげこうとする下心をもって、「洗礼の場」の様子を見に来たのだと思われる。「蝮の子孫たち」と呼びかけには彼らへの非難が込められているが、このような非難は彼らが洗礼者ヨハネのメッセージを真剣に受け止めていなかった証拠である。

③ 「来りつつある怒り」

神に従った生活を送っていると自負していたファリサイ派やサドカイ派は神の裁きが自分たちに下るとは思わなかった。しかし、悔い改めの必要性を認めない彼らこそ、神の裁きの対象になる、と洗礼者ヨハネは警告する。

④ 「父を 私たちは持っている アブラハムを」

アブラハムはユダヤ人が最も尊敬する父祖。それは自分たちが神によって選ばれた民であることとしるしであった。ファリサイ派やサドカイ派の人々は、自分たちは選ばれた「アブラハムの子孫」だと誇っていた。しかし、ヨハネは彼らのことを「蝮の子孫たち」と呼ぶ。彼らは宗教的な生き方を装っているが、そこから生まれる実は、傲慢と独善という毒でしかないからである。石ころからでもアブラハムの子孫を起こすことができる神から見れば、血筋は何の役にも立たない。

⑤ 「悔い改めにふさわしい実」

8節ではファリサイ派とサドカイ派の人への具体的な戒めが語られる。8節の「悔い改めにふさわしい実を作りなさい」と10節の「良い実を作らない木」が対応している。この間に挟まれた9節で、「私たちは父アブラハムを持っている」と誇っても無駄だ、なぜなら神は石ころからでもアブラハムの子を起こすことができる、と洗礼者ヨハネは説く。ユダヤ人であることが救いを保証するのではない。だから、ヨハネはファリサイ派やサドカイ派の人々に「悔い改めにふさわしい実」を結ぶよう要求する。この実とは、神の支配に身をゆだねたことを態度で表すこと、つまり「洗礼」を意味している。人は誰でも「罪」という神との間に生じたずれを持っている。どんなに努力をし、どんなに良い行いを積んだとしても、そのままでは神に喜ばれる実を結ぶことはできない。人がまずなすべきなのは、生きる向きを変え、神との間にあるずれをなくすこと、

すなわち洗礼を受け、神の支配を身に受けることである。

③ 霊と火による洗礼（11―12節）

Ⓐ 「悔い改めのため、水で」「聖なる霊と火で」

11節では、ヨハネの洗礼とメシアの洗礼の違いが対比される。ヨハネの授ける洗礼は「水」によるものであり、「悔い改めのため」である。つまり始まるうとしている神の支配を受け入れ、生きる姿勢をそこに合わせたことを示す洗礼だと言われている。それに対して、来るべきメシアの洗礼は「聖霊と火」によるものである。つまり、この洗礼はもはや悔い改めのためではなく、人を救うための、そして同時に人を裁くためのものである。聖霊は生かし、火は焼き尽くす。ヨハネの授ける洗礼は、この決定的な洗礼に備えるためのものである。1行目の「洗礼を施す」と4行目の「洗礼を施すだろう」は、時制は違っているが、同じ動詞。しかも1行目の「私は」と4行目の「彼は」は強調のために置かれているから、「私は洗礼を施す」と「彼は洗礼を施すだろう」が鋭く対比されている。

Ⓑ 「その者の 箕が 彼の手に」

メシアの洗礼を、ヨハネは収穫のたとえを用いて説明する。その方は箕を手にして「麦」を倉に納め、「殻を消えることのない火で焼き払われ」る。脱穀した穀物を箕にすくい、風に向かってそれを投げ、軽い「もみ殻」と重い「実」を分けた。ちなみに「霊」と訳されるヘブライ語は「風」を意味する。麦ともみ殻とは、人と人との間に留まることに留まらない。来るべき方は一人の人間の中にある麦ともみ殻をもふり分けける。殻を除かれた人は、祝福のうちに生きることができるようになる。

④ イザヤ11章1―10節

Ⓐ ダビデ王朝の現実の王に失望したイザヤが、主の霊に満たされた理想の王がダビデの子孫から生まれることを語った有名な箇所。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで…」で始まり、「エッサイの根はすべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う」で閉じられている。エッサイとはダビデ王の父の名前であるが、この預言を語ったイザヤは紀元前8世紀の人であるから、エッサイやダビデが生きた時代よりも二〇〇年ほど後の人である。前七二一年に北イスラエル王国はアッシリアによって滅ぼされたが、南ユダ王国はまだ健在であり、イザヤはこの王国で預言活動を行った。南ユダ王国では最後までダビデ・ソロモンの子孫が王位を継承し、ダビデ王朝と呼ぶべき王権が確立していた。

Ⓑ 従って、ここでの「エッサイの株」とか「エッサイの根」は、ダビデ王朝を指している。ダビデ王朝が木にたとえられているが、「株」とか「根」と表現されているから、一度、切り倒された木のことだと思われる。ダビデ王朝は、いったんは倒れるが、しかし根が残った株から若枝が生えるように、よみがえるとイザヤは預言する

Ⓒ しかし、王朝をよみがえらせる「若枝」は、通常の王とはまったく異なっている。なぜなら、6―8節「狼は小羊と共に宿り、…幼子は蝮の巢に手を入れる」とあるが、このような絶対平和は普通には考えられないことだからである。彼が絶対平和を到来させることができるのは、ずば抜けた能力に恵まれているからではない。確かに4節に「その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢い

をもって逆らう者を死に至らせる」とあるように、他者に対する圧倒的な力をもっているが、その源泉は「主の霊」にある。

④だから、2節で「その上に主の霊がとどまる」と述べ、さらにこの主の霊の働きを説明して、「知恵と識別の霊、思慮と勇氣の霊」であり、「主を知り、畏れ敬う霊」だと記している。彼の使命の中には、「逆らう者を死に至らせる」「ことも含まれているが、それを果たすためには、誰が逆らう者であるかを識別する知恵が必要であり、識別した結果を最もふさわしい方法で実行する「思慮と勇氣」を持たねばならない。このような能力を彼に与えるのが「主の霊」である。

⑤このような霊に満たされなければ、託された使命を果たすことはできない。それをわきまえる彼は、「主を知り、畏れ敬う霊」を神に求めて、与えられる。彼にはこのような「主の霊」がとどまっているので、理想的な政治を執り行う王となる。

⑥メシアとは「油注がれた者」の意味であり、広く一般的に王を指す言葉である。しかし、狭い意味では、現実の王に失望した預言者が将来に期待した「超人間的な理想の王」を指す。しかし、現実に来た「メシア」は、人々の罪を代わりに背負って苦しむことが理想の裁きだ、と考え、十字架に上る。

⑤ 聖霊の風を受け止める

①旧約聖書はメシア（救い主）の到来を預言し続けた。洗礼者ヨハネはその流れの中で、最後の預言者として登場し、メシアのための道を備えるようにと呼びかける。今や神による救いの歴史は頂点に差し掛かり、決定的な救いの時を迎えようとしている。

②洗礼者ヨハネは、神の支配に先駆けて「荒野」で人々を待ち受ける。ヨハネは「あなたがたは悔い改めなさい、なぜなら天の国が近づいた」と呼ばれる。彼は人々に洗礼を授けることを通して、その生きる方向を神に向けさせ、来るべき方に備えて真実な実りを結ぶようにと呼びかけている。マタイ3章1―12節は三つの段落に分けることができるが、そのいずれにも「洗礼・洗礼を施す」と「悔い改める・悔い改め」とが使われている。「悔い改め」と「洗礼」という言葉を使って、神の支配に気づいて受け入れる者の姿を描いている。

③来るべき方による洗礼は、決定的な救いであると同時に決定的な裁きである。それに先立つヨハネによる洗礼は、この決定的な洗礼に備えるための洗礼に他ならない。ヨハネは洗礼を授けることを通して、人々を神の「いのち」へと結びつけ、来るべき方に備えて、真実な実りを結ぶようにと呼びかけている。

④人の心には、すべての誇りや虚栄が無意味となってしまうような「荒野」がある。それは虚飾によって覆い隠していたものがあらわになる世界である。しかしそこにイエスを迎え入れるとき、人の内にある余計な殻は焼き尽くされ、実は聖霊の風に祝福されて留まる。従って、イエスからの風によって洗われることは、実を結ぶことに他ならない。ヨハネの授けた洗礼とは、身も心も神へと開き、イエスがもたらそうとしているこの聖霊の風を帆いっぱい受け止めるための備えである。